

ダニエル書 - 第百九十二番

隠された歴史を解き明かす：ダニエル書11章の預言的符合と十四万四千人の封印

Jeff Pippenger

2024-04-22

私たちは、ダニエル書十一章四十節の「隠された歴史」について考察している。それは、1989年の終わりの時にその記された証言が終わりを告げ、四十一節に言及される日曜法に至るまでの期間である。隠された歴史は、終わりの日々に関するすべての預言の筋道をそろえるための枠組みを表しており、十四万四千人の封印はその隠された歴史の中で行われる。その歴史こそが、獣の像の形成に関連する試練が起こる場である。ゆえに、そこでネブカドネツアルの獣の像に関する隠された夢の封印が解かれる。その隠された歴史は、ドナルド・トランプの一期目に由来する隠された歴史がダニエル書十一章二節で収束し、三節へと整合していく場でもある。その隠された歴史は、終わりの時代に関わるダニエルの預言の一部であり、それは日曜法において恩恵期間が閉ざされる直前に封印が解かれるイエス・キリストの啓示である。これらすべての真理の筋道は、第七にして最後の封印が取り去られることとして表されている。

ダニエル書11章の10節から15節は、その隠された歴史と整合させられるべきであり、そしてそれらのうち最後の三節は三つの預言の筋を示している。これらは、教皇制が再び歴史に介入する時を示し、ちょうど紀元前200年、ダニエル書11章14節に表されている預言の歴史に異教ローマが初めて入り込んだときと同じようにである。その節と、その節が異教ローマの歴史において成就した事実は、幻を確立した。というのも、異教ローマは、自らを高め、神の民を略奪し、そして倒れた力の象徴であったからである。背教的プロテスタントはその節をアンティオコス・エピファネスに適用したが、ミラー派はそれを異教ローマに適用し、その節をミラー派の歴史における試金石となる真理として位置づけた。今日、現代のラオデキヤ的アドベンチズムの神学者たちは再びそれがアンティオコス・エピファネスであると教えているので、それは再び試金石となる真理である。

それは試金石となる真理であるだけでなく、その聖句と紀元前200年におけるその成就是、ツロの淫婦（現代のローマ）が悪魔的な歌を歌い始める時を特定し、教皇権が終末時代の歴史に入り込むことを指し示している。したがって、それは終末時代の主要な試金石の真理を表し、ミラー派の歴史における論争が示す試金石の真理と一致している。

この三つの節はまた、地の獣の共和党の角の系列を表しており、1989年の「終わりの時」にロナルド・レーガンから始まった大統領の系列において、七人に数えられる八番目の大統領として二期目に入るドナルド・トランプの予言的な歩みを示している。十二節のラフィアの戦いの後、「アンティオコス」はまずアメリカ合衆国内の反乱を鎮圧し、その後、パニウム（パニウム）の戦いにおいてエジプトに代表されるグローバリズムとの戦争に備える。トランプはその戦争に勝利するが、その戦争は第三次世界大戦（アクティウム）を引き起こす。これらの事柄は、ラフィアの戦いでエジプトに敗れたが、パニウムの戦いで勝利で報復を果たしたアンティオコス3世マグヌスによって予表されていた。

第13節では、「幾年かの後」、アンティオコス・マグヌスについてユライア・スミスは次のように述べている。『アンティオコスは、自国の反乱を鎮圧し、東方の地域を服従させて安定させると、若きエピファネスがエジプトの王位に就いたとき、どのような企てにも取りかかる余裕があった。そして、この機会は領土を拡張するのにあまりにも好都合で見逃すわけにはいかないと考え、彼は「以前のものより大きい」途方もない軍を起こした。』トランプはまず自らの王国で反乱を鎮圧し、それから、以前に敗北したときよりも大きな軍隊を準備するだろう。トランプは2020年に敗北したが、それは黙示録第11章の成就であり、世界的グローバリズムを代表する無神論の獣と、民主党・共和党の双方のグローバリストが選挙を盗んだときであった。そして、ツロの淫婦の主要な代理軍として、プーチンがウクライナに勝利するときにも、それはまた敗北となるだろう。

私たちが検討している三つの節における第三の予言的な路線は背教的プロテスタンティズムであり、それはマカバイ家の系統と、アンティオコス・エピファネスがギリシアの宗教をユダヤ人に押しつけようとしたことに対する彼らの反乱によって表されている。トランプの路線と背教的プロテスタンティズムの路線は、最終的に合流して獣の像として表される角となる二つの権力を表している。13節から15節は日曜法に至る歴史を表しており、背教的プロテスタンティズムと背教的共和主義という二つの路線は、日曜法に先立って両者が結集し政教一致を進める中での二つの権力の相互作用を示している。

過去の記事で、1776年、1789年、1798年という日付が示す三つの出来事、すなわち独立宣言、憲法、そして外国人・治安法が、聖書預言における第六の王国としての地の獣の始まりへと至る時代を指し示していることを明らかにしてきた。したがって、これら三つの道しるべは、聖書預言の第六の王国の終わりへと導く三つの道しるべでもある。私たちは、1776年から1798年にまたがる22年間は、十四万四千人の封印の時を象徴していると特定してきた。というのも、二十二という数は神性と人性の結合の象徴だからである。

私たちは、この歴史が「真理」の印を帯びていると認識した。最初と最後の道標が、それぞれ独立の確立と独立の喪失を表しているからである。三つの道標はいずれも地の獣の主要な象徴を表している。なぜなら、それらはすべてアメリカ合衆国が「語る」ことを表しており、「国家が語る」とは立法府および司法当局の行為だからである。中央の道標である1789年は、合衆国憲法が十三の植民地によって批准された年であり、またヘブライ語の「真理」という語の中央の文字は十三番目である。さらに、1776年から1798年までの22年間は、ヘブライ文字を構成する22の文字とも一致している。

私たちはまた、1798年の外国人・治安諸法が、アメリカ合衆国が竜のように語る時点を示していることも確認した。ダニエル書11章13節から15節に見られる背教したプロテスタントの系譜の一部である、ユダヤ人とローマとの同盟の歴史は、獣の像が形成される時期を表しており、その像の形成は十四万四千人にとっての最終試験である。それは彼らが封印される前に通過しなければならない試験である。したがって、紀元前161年から紀元前158年にかけてのユダヤ人の同盟は、十四万四千人の一員となるように召された者たちが受ける試験における重大な要素である。

紀元前161年から同158年までが、ユダヤ人の同盟が象徴する期間を表すと受け入れることは、歴史の教えるところに反する。というのも、歴史家たちはその同盟は紀元前161年

のことだと教え、ミラー派はそれを紀元前158年のことだと教え、そしてその事実に対するミラー派の確信は両方の聖なる図表に示されているからである。

問題は、歴史家がユダヤ人との同盟を紀元前161年と年代比定するのが正しいのか、あるいはミラー派が紀元前158年とするのが正しいのか、ということだけではない。どちらの選択にも、それに同意する立場の人々がいる。問題は、歴史家とミラー派の双方が正しく、ユダヤ人との同盟に関する真実が、歴史上の二つの可能な単一の時点のいずれかではなく、実際には一定の期間を指しているのかどうか、という点である。

以前の記事で私たちは、ローマとユダヤ人の同盟が紀元前161年から紀元前158年までの期間を表し、その期間が獣の像の形成を象徴しているという、私たちが妥当で聖別された論理だと信じる論証を提示してきました。そうであるなら、ユダヤ人のローマとの同盟が一つの期間であることを受け入れるという決断そのものが試練となり、その預言的な意味において、それは獣の像の形成が「神の民にとっての大いなる試練」であるという事実と一致します。

とはいえ、紀元前158年は、マカバイとして知られる背教的ユダヤ人とローマとの同盟が確固として確立された時を示しており、それゆえ日曜法を象徴している。というのも、聖書は修辭的にこう問うからである。「二人が同意しないで一緒に歩むことができようか。」紀元前158年はまた、背教的プロテスタントが教皇権と手を結ぶ場所と時を示しており、さらに、紀元前161年に始まり紀元前158年に至るまでのその期間は、獣の像の形成を表す時期を示している。この期間が、背教的プロテスタントが背教的共和主義と結びつく時を示していることを認識するのは不可欠である。これら二つの背教的権力は13節から15節に表されているので、いくつかの共通の道標を共有している。

2001年9月11日を象徴するものとして1776年、1789年、1798年を適用し、その後2021年1月6日に関連する偽旗運動に関するペロシによる裁判と、日曜法へと至るバイデンの「盗まれた選挙」の就任期が続くとするのは正しい。この適用においては、独立宣言に対応する2001年の愛国者法が、独立の剥奪の始まりを特定する道標となる。次に、ペロシとシフによるでっち上げ裁判が憲法の批准に対応する第二の道標となり、これにより憲法の覆しの始まりを象徴する。その後、第三の道標として外国人および扇動法が続き、合衆国が竜のように語ることを表す。このようにこれらの道標を適用することは、マカバイにより表される背教的プロテスタントの道標を特定することにほかならない。

別の次元では、背教的共和主義と結びつけて三つの道標を特定することは、やや異なる適用を生む。2001年9月11日は1776年に対応するが、背教的共和主義に関しては、1789年は外国人・治安諸法に対応し、そしてそれらの「諸法」と、竜が語ること、すなわち日曜遵守の強制によって表されるものとの間に区別を打ち立てる。二つの線を獣の像の試験という文脈で並べると、それらは獣の像を立てることの預言的構造を形作り、神の民にとっての大いなる試験は獣の像の形成である。神の民にとっては、終わりの時代の人々が政治的・宗教的世界におけるその形成を認識するために、まず神の言葉の中に示されている（形成されている）獣の像の形成を、それが示されているとおりに認識しなければならない。

では、2021年1月6日のペロシ裁判は、どのように外国人・治安法と整合しうるのだろうか。ペロシ裁判は、グローバリズムを煽り立てた裕福な大統領を打ち倒したばかりの底なしの淵の獣による祝賀を示すものだ。その祝賀の流れはバイデンの就任期に始まり、トランプの二度目の就任で終わる期間を指している。付け加えると、トランプは三度大統領選を戦い、最初と最後には勝つが、真ん中の勝利は、聖書が「偽りの父」と呼ぶ勢力によって奪われた。盗まれた選挙とともに始まったペロシ裁判は、トランプが2025年1月20日に就任するときに始まる第二の報復的なペロシ裁判の一連を指し示している。

ジョー・バイデンの大統領任期は、一連のペロシ裁判で始まり、一連のペロシ裁判で終わる。どちらも政治裁判だが、二度目の一連の裁判で起訴されるのは、最初の裁判で主導した者たちである。トランプの二度目の就任式では、紀元前164年を示される。トランプの二度目の就任は紀元前164年を型としており、ユダヤの神殿の再奉獻は、政治の神殿が二度目に再奉獻されることを表す。

それはまさにアンティオコス・エピファネスが死んだ年であり、彼はギリシャの宗教的慣行をユダヤ人に押しつけ、その結果、紀元前167年のマカバイの反乱を引き起こした。2025年のトランプの二度目の大統領就任式において、ギリシャの宗教（グローバリズム）は米国で完全に抑え込まれ、教会と国家を一体化させる働きを後押しする悪魔的な奇跡が起こり始める。その時点でトランプは外国人および扇動諸法に相当する大統領令に署名し、これによって獣の像の形成の始まり（紀元前161年）を画すことになり、彼はペロシ裁判の第2シリーズを開始する。外国人および扇動諸法は獣の像の形成期の始まりを画し、その期間は日曜法で終わるが、それは紀元前158年によって型として示されている。

したがって、獣の像の形成期は、トランプが大手メディアを停止させ、不法移民を国外追放し、民主党の陰謀に関与した者たちを逮捕して裁判にかけることを可能にする「法律」から始まる。この時期は、トランプによる政治的迫害で始まり、宗教的迫害で終わる。

この意味で、1789年と憲法における中間の道しるべは2021年のペロシ裁判であり、それは始まりと同じ歴史で終わる時期を表しているが、最後の一連のペロシ裁判は、現在起訴され投獄されている人々の立場の政治的な逆転である。背教的プロテスタンティズムの系統における第二の道しるべは、ジョー・バイデンの大統領任期にまたがるペロシ裁判であり、その期間は2025年1月に終わる。それは、背教的共和主義の系統における1789年の道しるべが、トランプの二度目の就任に直ちに続く大統領令とともに2025年1月20日に到来するときである。それが、国家が竜のように語る（Alien and Sedition Acts）時期の始まりとなり、国家が竜のように語る日曜法へと至る。その期間、1789年に代表される憲法は段階的に覆されていく。

トランプの二期目の就任式において、彼は「七人に属する八番目の大統領」となり、獣の像の形成は、プロテスタント主義と共和主義の背教した角が一つの角として結びつき、その関係においてプロテスタントが主導権を握っていることを示している。まさに同じ時代に、十四万四千人となるように召された者たちは、間もなく到来する日曜法において真のプロテスタント主義の角として高く掲げられるに先立って、封印される。

イエス・キリストの黙示である封印のメッセージは、猶予期間が閉じる直前に解き明かされ、終わりの時に関するダニエル書の一部分である。その解き明かされる部分はダニエル書11章40節の隠された歴史であり、同章の13節から15節はその隠された歴史と一致している。ゆえに、猶予期間が閉じる直前に解き明かされ、ネブカドネツアルの獣の像の隠された預言的メッセージによって予表されてきたそのメッセージは、同章の13節から15節においてマカバイ家とアンティオコス三世によって表されている、プロテスタント主義と共和主義という背教の角の二本の棒の結合という、まさにそのメッセージである。獣の像の形成を示すメッセージは、真のプロテスタントの角に刻印する聖化を伝えるメッセージである。

第十四節では、紀元前200年に、アンティオコス3世とマケドニアのフィリッポスによって結ばれた対エジプト同盟からエジプトの新しい幼王を守るために立ち上がったことにより、異教ローマが預言の叙述に初めて登場する。その年、アンティオコス3世はプトレマイオス5世に対してパニウムの戦いを行った。「幻を確立するあなたの民の略奪者」の導入、アンティオコスとフィリッポスの同盟、そしてパニウムの戦いは、いずれもその年に起こった。したがって、この道標は、地の獣の共和政の角を象徴するアンティオコスと、ギリシャの古称であるマケドニアのフィリッポス（国際連合を象徴する）との同盟を指し示している。

預言的なレベルでは、パニウムの戦いにおいて、竜（マケドン）と偽預言者（米国）の間に同盟が結ばれる。その同盟の根底にある動機は、崩壊しつつあるロシアを象徴することになるエジプトの領土を分割することだった。

イエスが弟子たちをパニウムへ連れて行かれたとき、その地は当時カイサリア・フィリッピと呼ばれていた。ヘロデ大王の孫ヘロデ・フィリッピが都市の復興を成し遂げ、皇帝アウグストゥスと自分の名にちなんで名づけたのである。ゆえにカイサリア・フィリッピとなった。両者の関係はローマとローマを表しているが、フィリッピはカエサルに対しては下位のローマであり、また預言的な次元ではヘロデ・フィリッピはヘロディアの娘サロメを表している。したがって、カイサリア・フィリッピという名称において、ヘロデ・フィリッピは偽預言者を、カエサルは教皇制を表していることがわかる。

それゆえ、パニウムの預言的歴史は二つの同盟を示している。ひとつは偽預言者（トランプ）が竜（国際連合）と手を結ぶものであり、もうひとつは偽預言者（トランプ）が教皇制（カエサル）と手を結ぶものである。第16節では日曜法が示され、そこで三者同盟が実行に移されるが、その取り決めは実際には日曜法に先立って、第15節とパニウムの戦いにおいてすでに整えられていた。

「神の律法に反して教皇制度の確立を強制する布告によって、わたしたちの国は義と完全に縁を切ることになる。プロテスタント主義が深い隔たりを越えてローマの権勢の手を取ろうと手を差し伸べ、さらに深淵を越えて心霊主義と手を結び、この三重の連合の影響のもとに、わが国がプロテスタントかつ共和政の政府としての憲法のあらゆる原則を否認し、教皇的な虚偽と惑わしの流布のための規定を設けると、わたしたちは、サタンの驚異的な働きがなされる時が来ており、終わりが近いことを知るのである。」『証言』第5巻、451頁。

次回の記事でこの研究を続けます。

啓示とは、新しいものの創造や発明ではなく、それが明らかにされるまで人間には知られていなかったものの顕現である。福音に含まれる偉大で永遠の真理は、たゆまぬ探求と、神の前に自らを低くすることを通して啓かれる。聖なる教師は、真理を求めへりくださった者の心を導き、聖霊の導きによって、御言葉の真理がその人に知らされる。そして、このように導かれること以上に確かで有効な知識への道はない。救い主の約束はこうであった。「真理の御霊が来るとき、彼はあなたがたをすべての真理に導く。」私たちは、聖霊が与えられることによって神の御言葉を理解するようにされる。

詩編作者はこう書いている。「若者はいかにして自らの道を清くできるのか。それは、あなたの御言葉に従ってその道を心して守ることによってである。私は心を尽くしてあなたを求めました。どうか、あなたの戒めから迷い出ることのないようにしてください。……私の目を開いて、あなたの律法のうちにある驚くべきことを見させてください。」

私たちは、隠された宝を探し当てようとするように、真理を求めるよう諭されている。主は真理を求める真の求道者の悟りを開き、聖霊は啓示の真理を把握する力を与えてくださる。これは、詩篇の詩人が、律法のうちにある驚くべき事柄を見ることができるよう自分の目を開いてくださいと願うとき、意味していることである。魂がイエス・キリストの徳をあえぎ求めるとき、思いはより良い世界の栄光を把握できるようになる。聖なる教師の助けによってのみ、私たちは神のことばの真理を理解できる。キリストの学び舎において、敬虔の奥義の理解が私たちに与えられるので、私たちは柔和で謙遜であることを学ぶ。

御言葉に靈感を与えた方こそ、御言葉の真の解説者であった。キリストは、聞く人々の注意を自然の単純な法則や、彼らが日々見たり手にしたりしている身近な事物に向けさせることで、教えを例証した。こうして彼は、彼らの心を自然界から霊的なものへと導いた。多くの者は、彼のたとえの意味をすぐには理解できなかったが、偉大な師が霊的真理を結びつけて示した対象に日ごとに触れるにつれ、ある者は、彼が心に刻もうとしていた神の真理の教訓を悟り、彼の使命の真実を確信して福音へと回心した。サバス・スクール・ワーカー、1909年12月1日。